

「青年海外協力隊OB」

日名 耕司さん

HINA Koji

世界の貴重な
野生動物を守りたい

青空の下に広がる白い砂浜、青く透き通った海。フィリピンから東へ約750キロ、楽園のような光景の国パラオ。緑豊かなジャングルが広がる300余りの島々を取り囲むのは、美しいサンゴ礁だ。そこに集まってくるのがさまざまな生き物たち。色とりどりの魚、イルカ、マンタ、サメ…。ウミガメやジュゴンなど、密漁などで生息数が減少し、絶滅の危機に瀕した動物もいる。その保護に向けて活動したのが日名耕司さんだ。

大学院では獣医学を専攻し、アザラシの生態など

JICA Volunteer Story

PROFILE

1981年京都府出身。大学院で獣医学を専攻し、2011年1月から2年間、青年海外協力隊(生態調査)としてパラオで活動。

「人と野生動物が共存できる社会をつくりたい」

手つかずの自然が残る、太平洋に浮かぶ島国パラオ。日名耕司さんは青年海外協力隊員として、パラオの人々と野生動物保護に取り組んだ。

を研究していた。青年海外協力隊を知ったのは、野生動物の管理方法について学ぶ研修で、アフリカのザンビアを訪れた時。国立公園で活動していた協力隊員と交流する機会があった。「野生動物の保護管理に取り組み協力隊員の話聞き、密猟が起る背景には、貧困など開発途上国ならではの課題があることを知りました」。

自分の専門を生かしてできることがあるかもしれない。意を決して協力隊に応募し、2011年、パラオで活動をスタートさせた。

現地の人々と地道に積み重ねた調査

配属先は、水産資源局で希少な生き物の生息地を保護・管理する絶滅危惧海洋生物保全プログラム部門。ウミガメ、ジュゴン、イリエワニを主な保全の対象としている。これらはパラオの人々にとって古くからなじみの深い動物。昔話に出てきたり、骨や甲羅はアクセサリーとして使われたりもする。現在、ジュゴンの捕獲は法的に全面禁止されているが、生息環境の破壊や密猟などで、その数は減少の一途をたどる。観光客にも人気の動物だけに、パラオの観光業への影響も大きい。

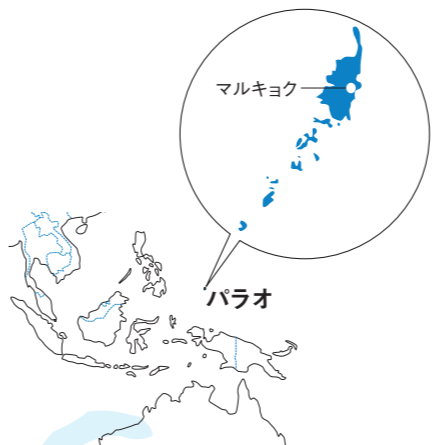
そこで、日名さんが取り組んだのが野生動物の生態調査。どこにどれだけ生息するのか、どんな行動パターンがあるのかを調べ、そのデータを蓄積することで効果的な保全計画に生かしていく。しかし、自然の中に生きる動物を調査するのは容易ではなかった。ボートに乗って夜通しワニを探し続けたこともあれば、ウミガメの産卵状況を調べようといくつもの砂浜を回ったことも。何と言っても自然が相手のため、調査対象の動物がなかなか見つからなかつ



a.ジュゴンの死がいを見出し、死因を調査するために解剖を行った
b.人家の近くでワニが発見された場合、わなで捕獲して離れた場所に放す活動も行った。捕獲用のわなを補修する日名さん
c.ジュゴンの骨の標本の作り方を同僚に伝え、環境教育に生かしてもらう
d.油まみれで漂っていたウミガメを保護し、油を洗い流した後に海へ返した



ウミガメの卵がふ化した巣穴を掘り起こし、殻から産卵数やふ化の確率を調査する日名さん(左)



たり、海が荒れて調査場所にたどり着くのもやっとだったり…。でも、そんな苦労は、ウミガメの卵が無事にふ化しているのを見たらすべて忘れてしまいました」と日名さんは振り返る。

一番苦労したのはジュゴンの調査だった。そもそも生息数が少ないため、発見することさえ難しかったからだ。そこで日名さんはパラオに住む人々、そしてこの国を訪れる観光客にも協力してもらうことに。ヘリコプターなどの観光遊覧やダイビングツアーを主催している会社を回って協力を依頼し、海で野生動物を発見したら情報提供してもらえよう働きかけたのだ。「野生動物の調査は根気のいる作業。現地の人々の協力なしには進められませんでした」と日名さんは話す。

こうした地道な活動を続けるうちに、活動2年目にはジュゴンの解剖という重要な仕事を任せられた。「パラオの自然保護官から『コウジのことを信頼しているから任せる』と言ってもらえ、励みになりました」。ジュゴンの保全に向け、死がいも解剖して死因を調査した。

さらに日名さんは、野生動物の保全にはパラオの人々の理解が欠かせないと、啓発活動にも取り組んだ。子どもたちを対象にしたイベントにブースを出し、イリエワニやウミガメの標本を使って生態を分かりやすく説明。「実際に見て触れることで、子どもたちは興味をわいたようです。密猟を止めるには人々の意識を変えることが必要。そのきっかけづくりができたと思います」。

今年1月に活動を終え帰国した日名さんは、協力隊の経験を生かし、人と野生動物が共存できるような取り組みを支援する仕事を続けていきたいと考えている。